

模擬授業を通じて自己省察力を養うには

永倉由里

How to Cultivate Self-reflection through Microteaching

NAGAKURA Yuri

2021年10月27日受理

抄 録

本稿は、2020年度の初等教育課程の選択科目「小学校英語指導Ⅱ（2021年度より必修科目となる英語科教育法に相当）」の履修生（3年生、21名）が模擬授業に取り組む過程に焦点を当てた実践研究である。

学生が模擬授業を行う際には、どのような点に重きを置いて取り組むのか、さらにそれらの留意点をどのようにして具体的な指導案作成や模擬授業実践に落とし込むのかを十分に検討することが求められる。本実践では、教師としての成長を促す意図で作られた「小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）」（2.1で後述）と併せて、筆者が提案した「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」（4.1で後述）を用いて概念の具現化を促し、成長する教師に欠かせない自己理解と自律性を高める方略を探求している。模擬授業実践の概要と学生の活動状況ならびに振り返りの内容について報告する。

キーワード：小学校英語指導者養成、J-POSTL エレメンタリー、学習者理解、授業分析、省察方略

1. はじめに

学習指導要領によれば、学習者は「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間力等」を養い、教師はそれらを総合的に育成することが求められている。しかし、その姿は、履修生が児童・生徒として経験してきた学びのあり方とも、お世話になった先生方の指導方法とも隔たりがあり、イメージしにくいであろう。

特に、小学校英語については、早期化・教科化に加え、デジタル教科書を活用した授業が当たり前になり、履修生が10年前に総合的学習の一環として高学年で経験したものは、ずいぶん変化してきている。いち早くコア・カリキュラムが示された初等課程の「英語科教育法」においては、学習指導要領で示された概念をもれなく扱うことになっており、模擬授業が必修となっている。しかし、これらの抽象的な概念を

模擬授業の指導案や授業実践の中に具体的に落とし込むのは容易なことではない。児童[役]の興味・関心、主体性、共同的な学習態度などに配慮しながら模擬授業を展開させるのはきわめて難しい。

本稿では、2020年度の初等教育課程の「小学校英語指導Ⅱ（選択科目、2021年度より必修科目となる英語科教育法に相当）」の履修生（3年生、21名）が、模擬授業に取り組む過程で、「小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）」（2.1で後述）と併せて、筆者が提示した「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」（4.1で後述）を用いることで、どのような振り返り・省察を行ったかを報告する。

各自が高めたいと感じた能力や態度を「J-POSTL エレメンタリー」の「自己評価記述文」の中から選択し、どのようなやり方でそれらを伸ばそうとするのかを、模擬授業に取り組むプロセスにしばって観察する。つまり、具体的な教育活動や指導方法には触れていない「J-POSTL エレメンタリー」に示された概念を、どのようにして模擬授業に落とし込むかのヒントとして「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」の利用を勧め、模擬授業における教師の行動・言動についてのイメージを描きしやすきよう支援した。

本実践は、筆者が授業担当者として、学生たちに模擬授業を通して何をどのように学ぶのかを意識させ、学生自身の学習に関する自己調整能力・自己省察力、言い方を換えれば、メタ認知能力を養う授業開発の試みでもある。学生は、模擬授業に取り組む過程での自身の思考や活動を注視し、自らの「学びに向かう力」について考える機会を提供されることになる。

これは近い将来教壇に立ち、児童・生徒の学びを適切に見取り、「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力」を養い、その結果を明示的に評価するときに備えることにもなる。

そのためには、反省や後悔にとどまらず、改善や成長につながる「省察」が必要となる。したがって、本研究は、学生たちに提案した「省察方法のトレーニング」であるとも言える。

2. 模擬授業への J-POSTL エレメンタリー（自己評価記述文）の活用にあたって

2.1 J-POSTL エレメンタリーとは

J-POSTL エレメンタリーは小学校で英語教育を担当する教師や小学校教員養成課程で学ぶ学生が、自らの専門性を高め成長するために活用するリフレクション・ツールである。そこには、小学校英語教育に必要な指導法の知識や技能が CAN-DO 形式の記述文で明示されており、その記述文をもとに、自身の教師としての資質・能力や授業力を振り返り、授業改善や教職課程での学修に役立てることができる。さらに、自らの成長を確認しながら授業実践や研修・学修を記録することもできる（神保他、2021）。

J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文には、小学校における外国語教育に携

わる者にとって、欠かせない要素が的確かつ詳細に述べられている。総じて、その有効性は高いが、使用場面や対象者等に応じて、その活用の仕方には議論の余地がある。

2.2 難しい自己評価記述文と5段階の自己評価の扱い方

自己評価記述文は、もれなくあらゆる角度からの省察を促し詳細に述べられており、その分量の多さに圧倒される感がある（表1参照、神保他（2021）、神保他（2020）をもとに筆者が作成）。すべてが「概念」を表しているため、学生たちにとっては記述文で示された「～できる」力をどのように高めていくかを見極めにくい。現場での経験のない学生にとっては、「できるか」という問いに答えるのは荷が重すぎるようにも感じる。

また、5段階の自己評価を求めているが、それぞれの数値が示す状態が明確ではないことから、その判断は学生の主観に委ねられる。

2019年度に半期15回の授業の序盤と終盤でこの数値の変化を見ようとしたが、短期間で成長を自覚することは困難であり、自己を見つめ、自律的に自己理解と自己調整を促すことを目指すポートフォリオにおいて、この数値をどのように扱い、その結果をどう捉えるかが大きな課題として

表1 J-POSTL エレメンタリーの構成（記述文数）

分野	領域	完成版	教職課程 試用版
I 教育環境	A. 教育課程	3	2
	B. 目標とニーズ	5	5
	C. 言語教師の役割	9	7
	D. 組織の整備と制約	1	1
II 教授法	A-1. 話す活動 やり取り	6	6
	A-2. 話す活動 発表	6	5
	B. 書く活動	6	4
	C. 聞く活動	4	3
	D. 読む活動	10	3
	E. 文法	2	1
	F. 語彙	5	2
	G. 文化	8	2
III 教授資料の入手先		11	5
IV 授業計画	A. 学習目標の設定	6	6
	B. 授業内容	11	6
	C. 授業展開	5	5
V 授業実践	A. 授業案の使用	6	6
	B. 内容	2	1
	C. 児童との交流	6	3
	D. 授業運営	5	3
	E. 教室での言語	5	5
VI 自立学習	A. 児童の自律	4	2
	B. 宿題	1	0
	C. プロジェクト学習	6	0
	D. ポートフォリオ学習	5	0
	E. ウェブ上での学習環境	3	0
	F. 教室外活動	4	0
VII 評価	A. 評価方法の考案	3	1
	B. 評価	7	4
	C. 自己評価と相互評価	2	0
	D. 言語運用	5	1
	E. 国際理解(文化)	3	3
	F. 誤答分析	2	2
合計		167	94

残った。

なお、本実践では、教職課程に特化し自己評価記述文を94に絞った試用版（神保他、2020）を使用した。完成版（神保他、2021）は現職教員用の記述文を含む167の記述文で構成されている。

2.3 省察ツールとしての J-POSTL エレメンタリー利用の留意点

柳瀬（2014）は、デュエイの省察論から J-POSTL を検討している。すなわち「振り返り」と「省察」とは異なり、「省察」とは経験についての思考であるが、過去について反省するだけにとどまり行動が伴わないものは除かれ、今後の行動について仮説を立てた上で行動し、それを検証するところまでを含んでおり、不完全な状態に甘んじている自己を認識するだけでなく、未来に対する責任の自覚だと論じている。

また、柳瀬（2014）は、ユングのタイプ論から、「省察」を行う個々人（ここでは教師志望の学生）は、構え（外向性・内向性）も機能（思考・感情・直観・感覚）もそれぞれ異なる存在であることに着目している。さらに、人は自覚している意識だけではなく、無意識のうちに自分を高めよう、社会のためになりたいなどという働きを有しており、そうした無意識の魂のようなものが自覚のある意識のゆがみを正そうとしていることを踏まえるべきだとしている。

この無意識の感情は、安心・安全でオープンなやり取りができる関係性のもとで、選択の余地を与えられるなどして自律性が認められ、興味関心を刺激され驚きや感動を味わえるといった、多くの条件が満たされた状況において生じるとされている。そして、驚くことにこの無意識の感情には、言語使用を活性化させ、思考を高め、ひいては主体的な行動を促す働きがある（Damasio、2000）ことに注目したい。

したがって、教師は、学習者の無意識の感情が抑制されることなく、楽しく共同的に学び、各自の思考が学習行動（ここでは模擬授業）に反映しやすいよう関係づくり・授業づくりに努めなければならない。

3. 研究の背景と研究の目的

3.1 対象学生

対象学生は、2020年度後期の選択科目「小学校英語指導Ⅱ」を受講した教育学部初等教育課程の3年生21名である。コロナの影響で例年前期に行われる小学校実習が後期に延期されたこともあり、履修者数は例年よりかなり少なかった。しかし、その分熱心な学生が多かったとも言える。

彼らは、小学校時代に総合学習の一環として小学5、6年時に外国語活動の授業を経験している。しかし、当時の外国語活動は、現在求められている小学校英語指導とはかなりの隔たりがあり、自身の小学生時代の経験をもとに、授業者として果たすべき役割や児童の学習のあり方を理解していると判断してはいけない。他教科では、自らの学習経験が活かされる場面が多いのと比較すると、英語指導に対して不安を感じたり前向きになれない者が見られるのも理解できる。

本学の初等教育課程に英語専攻は設置されておらず、小学校英語に関連する科目は、「小学校英語指導Ⅰ（「英語Ⅰ」に相当、2年前期）」と「小学校英語指導Ⅱ（「英語科教育法」に相当、3年後期）」の2科目である。

2年次の「小学校英語指導Ⅰ」において、それまでの英語学習について振り返ってもらった。約半数が苦手意識を持ち小学校での英語指導に不安を感じていると回答した。小学校教員志望なので頑張りたいと意欲を覗かせながらも教員採用試験で加点対象となる英検準1級やTOEICに挑戦しようという者は筆者の知る限り90名中2名であった。

履修生21名は、2年次の「小学校英語指導Ⅰ」において優秀な成績を修めた者が多く、帯活動として慣れ親しみのための「聞く・話す活動」や見方・考え方を働かせ自分事として行う「言語活動」を経験し、その特徴や楽しさを知り、学習指導要領に謳われる英語によるコミュニケーションの概要については理解している。

3.2 「小学校英語指導Ⅰ」における対象学生の振り返りの傾向

2年時の「小学校英語指導Ⅰ」は選択科目であったが、全体の約80%（90名）が受講した。模擬授業後の数分をコメント記入の時間に当てた。それらの一部を紹介し、彼らの振り返りの傾向について検討する。カッコ内に筆者の見解を添えた。

- ・マイクロ・ティーチングは本当に難しいと思った。今回の反省点を次回に活かしたい。（感想→漠然とした意欲）
 - ・授業案は児童[役]の反応を考えながら作成しなければならないと気付いた。楽しい活動になるよう、身近な話題を取り上げたいと思った。（気づき→ある程度具体的な意思）
 - ・英語で指示を出すのが難しかった。グループにリズムを打つカラオケを使っている人がいてよと思った。（反省+気づき）
 - ・結局、かなりの部分が日本語になってしまった。シンプルでわかり易い英語を使えるようにしたい。（反省→ある程度具体的な意思）
 - ・みんなのお陰で楽しくできた。スムーズに英語が出てくればもっと楽しいだろうなあ。（感想→漠然とした期待）
 - ・児童[役]にウケたところがあって嬉しかった。他の人たちのいいところを取り入れていきたい。（感想→漠然とした意欲）
 - ・英語の授業の作り方が少しわかったような気がする。自分なりに工夫できることはしてきたい。（感想→漠然とした意欲）
 - ・指導案を作る時に頭の中で描いたようには進められなかった。教師[役]の態度や指示が曖昧で、児童[役]のみんなもどうしていいかわからなかったようだ。（反省）
- じっくり振り返る時間を与えなかったことも影響しているとは思いますが、「感想」と「反省」に終始し、その後の改善に向けた仮説や方略が示され、改善につながることを期待させてくれるものは極めて少なかった。

これらの状況から、①「振り返りの仕方がわかっていない」のではないか、②「改

善の仕方が思い浮かばない」のではないか、あるいは「そもそも取り組み方を意識する習慣がない」のではないか、という印象を強くした。

こうした学生の実態に鑑み、本実践研究の目的を以下のように定めた。

3.3 実践研究の目的

ここまでの議論から、本実践研究の目的は「短時間の模擬授業（マイクロ・ティーチング）について、J-POSTL エレメンタリーとマイクロ・ティーチング・ストラテジー 20（具体的な方略例、4.1 で後述）を併用することにより、省察（反省を改善に繋げる振り返り）を促す実践を通して、学生の思考・行動の実態と変容への理解を深めることにより、本授業の質を高めること」とする。

そして、学生が余分なストレスを感じることなく、各自の気持ちや思いを自由に、行動・言動に移して欲しいことから、以下の点に配慮した。

- (1) 楽しく共同的な雰囲気醸し出し思考を促す。
- (2) J-POSTL エレメンタリーのどの記述文に着目するかを選択を学生に委ねる。
- (3) 選択した記述文の概念を、どのように模擬授業に落とし込むかのヒントとして「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」を提示する。

4. 実践研究の概要

4.1 開講時から意識した3つのこと

マイクロ・ティーチングに関わる授業に入る第9時までには、学習指導要領、第二言語習得、デジタル教科書、指導計画等について扱うが、その間も、模擬授業に焦点を当てた省察がスムーズに行われるよう、以下の点に留意した。

- (1) 授業中に行う筆者の説明等において自己評価記述文との重なりに気づかせる。
- (2) 筆者が教師役として（学生が児童役として）諸活動を体験した後に、その中で使用されていた方略を「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20（表2参照）」と照らし合わせる。
- (3) 学生同士の共同的振り返りを促す。具体的には、第8時までの授業についてのコメント（自由記述）や、課題（例：文部科学省が配信する小学校外国語の授業のあり方等に関する動画を視聴してポイントと感想を提出）は、Google Classroom 上の全員が閲覧できる場所にアップロードしてもらう。

表2 マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20

- ①指導案の内容（単元・活動のねらい、言語表現、語彙等）を十分に検討する
- 1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
 - 2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
 - 3. 友達・教員等に相談する、話し合う

②社交・情緒ストラテジー

- 4. リックスして、間違いを恐れず、楽しむつもりで行う

③発声に関するストラテジー

- 5. 大きな声ではっきり話す
- 6. 発音、イントネーションやリズムに気をつける

④意味交渉ストラテジー

- 7. 児童[役]に伝わるよう、簡潔で平易な英語表現を用いる
- 8. 児童[役]に伝わるよう、ゆっくり言う（間の取り方を調整する）
- 9. 児童[役]に伝わるよう、繰り返して言う
- 10. 児童[役]に伝わるよう、例をあげる
- 11. 合いの手、ほめ言葉、疑問文等を用い、やり取りをつなげる

⑤正確さに関するストラテジー

- 12. 文法や語順を確認する
- 13. 発音、イントネーションを確認する

⑥非言語ストラテジー

- 14. 笑顔を保ち、児童[役]の目を見て話す（アイ・コンタクト）
- 15. ジェスチャーや表情をつけて話す

⑦教材・教具の活用

- 16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える
- 17. 音声教材を用い、聴覚に訴える
- 18. 教具・カード等を用い、手作業を取り入れ、思考を促す

⑧本番までの自己調整ストラテジー

- 19. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する
- 20. リハーサルを自撮りして、修正を図る

これは、中谷（2005、pp.65-78）の発話時のストラテジー分析を参考に、プレゼンテーション力の向上を目的とし、「伝わり易さ」と原稿作成から本番までの「過程」への意識を促す方略を20項目にまとめた「プレゼンテーション・ストラテジー（永倉、2021）」をマイクロ・ティーチング用に改めたものである。

①指導案の内容についての「2. ネット上にある指導例の動画を参考にする」について補足する。一般に公開されている授業動画は文部科学省が発掘した教育委員会主催の研究授業の様子などを紹介したものが多く、模範的な授業であることは間違いな

いが、学生が目標にするにはハードルが高すぎる。

たまたま筆者のゼミ生の中に Small Talk について卒業研究を進めている者がおり、より実践的に研究を進めたいと相談されたので、動画を作成し、現場の先生に見ていただき助言をいただくことになった。完成した動画 6 本を在学生在生に向け限定公開することに同意してくれたので、目標としやすいモデルを提示できた。

4.2 マイクロ・ティーチング用ポートフォリオとその活用

マイクロ・ティーチングは、授業の後半の第 11 時と第 14 時で 2 回行われた。1 回目は、5 年生対象の『New Horizon Elementary 5』（東京書籍、2020a）の Unit 6 What would you like? 2 回目は 6 年生対象の『New Horizon Elementary 6』（東京書籍、2020b）Unit 8 My Future, My Dream を扱った。

5～6 人でのグループ活動とし、まず、各単元の Starting Out（第 1、2 時）、Your Turn（第 3、4 時）、Enjoy Communication（第 5、6 時）のねらいとそこでの言語活動の特徴を、指導書にある単元計画をもとに確認した。一人 10 分程度の模擬授業を行うこととし、各自が担当する部分が前後の活動とどのようにつながるかを意識するよう助言を与えた。また、各々の模擬授業の冒頭には、主な活動とつながる Small Talk を含むことを条件とし、原則として英語で授業を展開させるよう指示した。もちろん日本語を使用した方が良いと判断した場面はこの限りではない。

言いたいことをその時点でとっさに英語にすることには不慣れで自信がない者が多いため、指導案には Small Talk 及び活動の指示、児童との活動の例などをシナリオのように記載してもらった。

グループ内で、各々の指導案やワークシートなどを共有・検討する必要性を伝え、Google Classroom を活用するよう勧めた。

模擬授業に関連する取り組みの手順は以下の通りである。

(1) 第 8 時に、「J-POSTL エレメンタリー」が完成するまでの経緯とその目的を紹介し、時間を与えて「自己評価記述文」を一読し意識したいものに印をつけてもらった。各記述文の意図が理解できるか、特に自身が高めたい項目はどれかを考えながら熟読してほしいと伝えると、「どの記述文にも目指すべき姿が示されている」「短期間で成果を得られるとは思えない」「どのようにして 5 段階の評価を上げればよいかわからない」「1 つの記述文に様々な要素が含まれている」「実際に教師になってからでないと取り組めないものがある」などという声が聞かれた。

(2) 第 9 時に、『New Horizon Elementary 5』の Unit 6 全体を [デジタル] 教科書と『Picture Dictionary』（東京書籍、2020c）並びに指導案を参考にしながら目を通した。続いて、5～6 人のグループになり、担当する箇所が重ならないよう調整した。話し合いの様子から、各々が「こんな風にやってみたい」とイメージを持てる部分を希望していたことが窺えた（導入部分 Starting Out を担当し、Small Talk を通して興味関心を引き出したい、練習部分 Your Turn を担当し、楽しみながら慣れ親しめる活動を行いたい、ゴール活動 Enjoy Communication を担当し、児童同士の意

味のあるやり取りを展開させたいなど)。ゴール活動については、真正性の高いリアルなやり取りが成り立つような場面の設定は難しいという声も多かった。

(3) 授業外で、担当する部分の指導案および教材や資料を作成する。併せて、ポートフォリオへの記入(図1の①~③と⑤自由記述)を行う。

① J-POSTL エレメンタリー(94項目)を熟読し、意識したい項目を選んで、番号と記述文を書き込む。

② その時点での自己評価(1~5の5段階)を行い、○印をつける。

③ 続いて、具体的に試用してみようと思う方略を「マイクロ・ティーチング・ストラテジー20(表1)」の中から選択し、番号を記入する。

(4) 第10時には、グループで担当する部分の学びの特徴と教師役の学生自身が特に留意した点を述べてから、模擬授業のリハーサル(10分程度)を行う。この様子を撮影係がスマホで録画する。その後、児童役の学生らと意見・感想を述べ合う。

(5) 授業外で、翌週の本番に向け、指導案等の修正および練習を行う。併せてポートフォリオへの記入(図1の⑤自由記述)を行う。

(6) 第11時に、前回と同じグループで模擬授業(10分程度)を行う。この様子を撮影係がスマホで録画する。その後、児童役の学生らと意見・感想を述べ合う。

(7) 授業外で、ポートフォリオへの記入(図1の⑤自由記述)を行う。

(8) 第12時には、『New Horizon Elementary 6』(東京書籍、2020b) Unit 8 My Future、My Dream について、(1)第9時と同様の活動を行う。

① 1~94の中から意識して改善しようと思う記述文を書いてください。

16	児童を話す活動に積極的に参加させるために、協同的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。
----	-----------------------------------------------------

② 1回目の模擬授業の前(○)と、④2回目の模擬授業の後(□)に、自己評価をしてください。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

③ 改善・成長に向け、試用してみようと思う方法を「マイクロ・ティーチング・ストラテジー20」の中から選んで記入してください。

1	2	7	11	
---	----------	---	----	--

⑤ 模擬授業の前後に随時、コメントを記入してください。

図1 マイクロ・ティーチング用ポートフォリオ(記入例を含む)

(9) 授業外で、上記(2)と同様の活動を行う。J-POSTL エレメンタリーを読み直し、追加する項目があれば、新しいページを使って、選んだ番号と記述文を書き込み、その時点での自己評価(5段階)を行う。新たに試用してみようと思う方略があれば「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20(表1)」の中から選択し、番号を追加する。

- (10) 第13時に、新しいグループで、(3)第10時と同様の活動を行う。
- (11) 授業外で、上記(4)と同様の活動を行う。
- (12) 第14時に、上記(5)と同様の活動を行う。
- (13) 授業外で、ポートフォリオへの記入(図1の④□印と⑤自由記述)を行う。

修正した指導案、教材・ワークシート、スマホで撮影した動画も、扱いに配慮することを約束し合って、Google Classroom 上で共有した。ポートフォリオの自由記述もなるべく Google Classroom 上で共有するよう促した。

5. 結果

本章では、1回目と2回目の模擬授業を20名のデータを扱う。コロナの影響で、模擬授業が予定されていた11月後半から12月中旬に教育実習があり、グループ活動への参加が叶わなかった1名は除かれた。

5.1 量的データの分析結果

ここでは、1回目の模擬授業の直後、2回目の模擬授業に向け、意識して取り組みたいと選択したJ-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文(図2)とマイクロ・

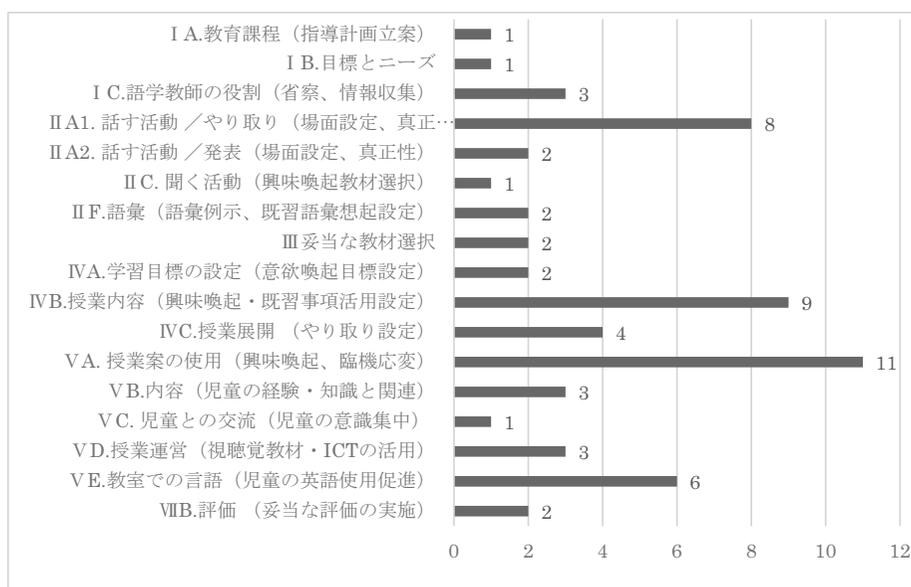


図2 模擬授業の改善のために選択したJ-POSTL 自己評価記述文(人)

ティーチング・ストラテジーの関連性を見ていく（表2参照）。

J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文については、II教授法（26種の記述文）の中で「A. 話す活動のやり取り」について意識したいと回答した者が10人と最も多く、「場面の設定」が7人、「非言語要素」が3人であった。

IV授業計画（17種の記述文）の中では「B. 授業内容」を選択した者が10人と最も多く、「興味関心を喚起しやる気にさせる場面の設定」が6人であった。

V授業実践（18種の記述文）の中では「A. 授業案の使用」を選択した者が11人と最も多く、「臨機応変な対応」が5人、「興味関心の喚起」が4人であった。

短時間の模擬授業ではあるが、教師〔役〕と児童〔役〕双方が活発に活動する姿を求めていることが窺える。同時に、見方・考え方を働かせるための「場面の設定」を検討しようとしていることもわかる。選択したJ-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文が同じであっても、その具現化の際に選択した方略は様々であった（表3参照）。

表3 選択した自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジー

	記述文の選択 人数	指導案例を参照	指導例動画を参照	友人・教員に相談す	リラックスする	大きな声	発音・抑揚	平易な英語	ゆっくり話す	繰り返し言う	例をあげる	ほめ言葉・合いの手	文法・語順を確認	発音を確認	アイ・コンタクト	表情・ジェスチャー	画像、実物等	音声教材	カード等の手作業	時間調整	自撮りリハーサル	
I 教育環	A. 教育課程	1	1						1				1	1								
	B. 目標とニーズ	1		1																	1	
	C. 語学教師の役割	3	1	2	3																1	
	D. 組織の設備制約	0																				
II	A1. 話す / やり取り	8	2	2	3	1	1	3	1	1	3	6	1		3	3	3			3	3	
	A2. 話す / 発表	2	1											1								
教授法	B. 書く活動	0																				
	C. 聞く活動	1	1	1													1			1	1	
	D. 読む活動	0																				
	E. 文法	0																				
	F. 語彙	2		1		1		2										2	1			
	G. 文化	0																				
	III 教授資料の入手先	2	2		1				1													
IV 授	A. 学習目標設定	2	1	1											1		2	2	2			
	B. 授業内容	9	6	1	3	1		2				1	1		2	1	4	1	2	3		
	C. 授業展開	4	3	3	2	1	1					1									2	1
V 授業実践	A. 授業案の使用	11	5	6	1	5	1					5			4	2	2				4	1
	B. 内容	3	1	2			1		1						1	1	1			1	1	
	C. 児童との交流	1		1													1					
	D. 授業運営	3			1												3	2	2	1		
	E. 教室での言語	6	2	2	1		3		4	2	2	1			1		2	1			2	
VI 自立学習	0																					
VII 評価	A. 測定法の考案	0																				
	B. 評価	2	1																		1	
	C. 自己・相互評価	0																				
	D. 言語運用	0																				
	E. 国際理解	0																				
	F. 誤答分析	0																				
	61	26	23	13	10	7	2	12	5	3	4	13	3	2	12	7	21	7	11	20	2	

学生の多くが選択した具体的方略は以下の通りである（カッコ内は述べ人数）。

- ・指導案の内容十分に検討するために
 1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする（26名）
 2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする（23名）
 3. 友達・教員等に相談する、話し合う（13名）
- ・自己調整ストラテジーに属する
 19. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する（20名）
- ・教材・教具の活用について
 16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える（21名）
 18. 教具・カード等を用い、手作業を取り入れ、思考を促す（11名）
- ・意味交渉ストラテジーとして
 7. 児童[役]に伝わるよう、簡潔で平易な英語表現を用いる（12名）
- ・非言語ストラテジー
 14. 笑顔を保ち、児童[役]の目を見て話す（アイ・コンタクト）（12名）

模擬授業についての省察を求めたため、授業法、授業計画、授業実践に関するものが多かった。自由記述の中では、自律性に関わる時間の確保について「じっくり考えないとカタチにならない」「片手間ではできない」が多く見られたが、「ないがしろにはしたくない」といった前向きな姿勢を示してくれる者も少なくなかった。

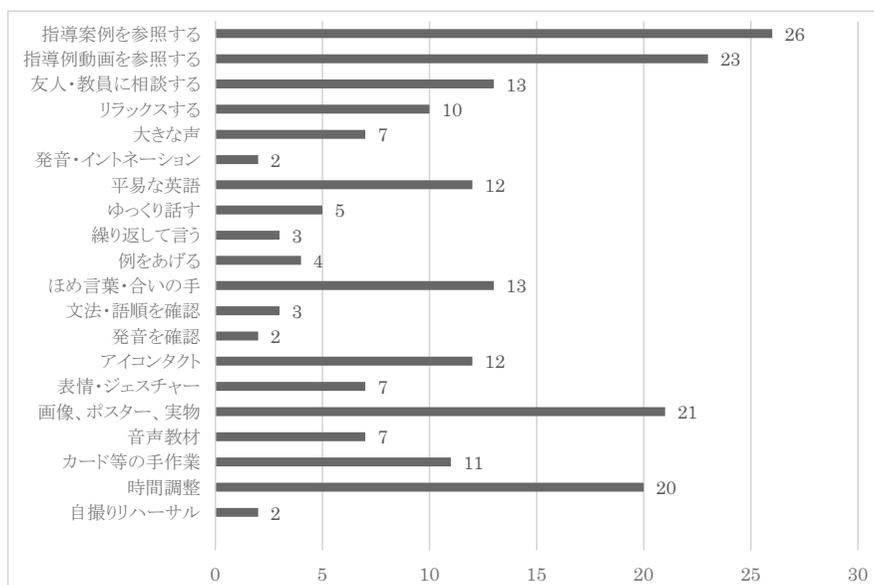


図3 マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20 の使用状況

生成された共起ネットワーク（樋口、2014）の円内の語句を含む記述を読み、色分けされたグループごとにその内容を整理した。比較的多くの学生が意識して取り組んだことが表れている（図4参照）。

- (ア) 準備段階で意識したことについて
- (イ) 実践の難しさについて
- (ウ) 真正性の高いリアルなやり取りの場面設定について
- (エ) 児童の言語活動について
- (オ) 児童の興味関心を喚起するリアルなやり取りである Small Talk について
- (カ) 児童同士のやり取りについて
- (キ) 反省を改善に繋げたための具体的方策・工夫について

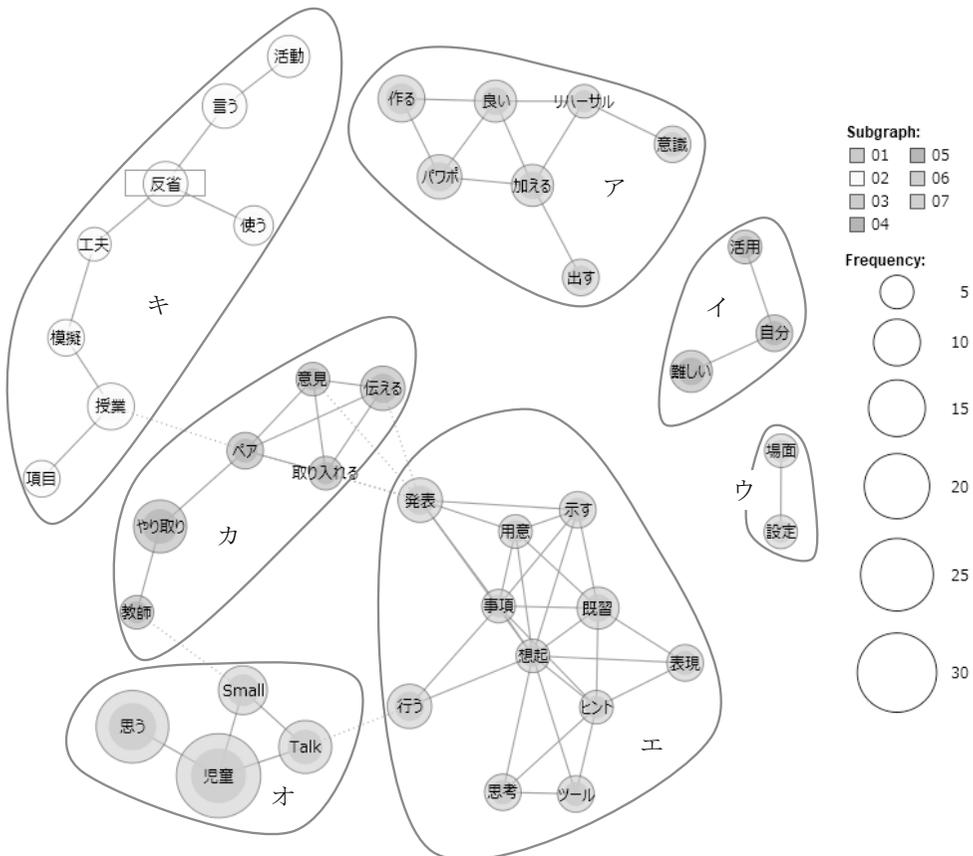


図4 「J-POSTL ポートフォリオ」に記載されたコメントの共起ネットワーク

5.2 質的データの分析結果

一連のマイクロ・ティーチングに関わるコメントと選択した J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文とストラテジーを紹介する。なお、下線は意識したことが行動につながったと判断できる箇所に施した。

〔学生 A のポートフォリオより〕

<第 9 時、1 回目の模擬授業に向けて選択した項目>

J-POSTL	43. 児童の年齢・興味・関心、英語力に適した教材を選択できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	3. 友達・教員等に相談する、話し合う

<第 11 時、1 回目の模擬授業後の自由記述>

ふるさとメニュー作りの代案として「道の駅」でお土産を買うことにした。実際に「道の駅」に行き、店内や商品を撮影し絵カードを作った。児童役が本当に楽しくリアルに活動してくれたのが嬉しい。

指導案通りに授業をやろうとするあまり、児童の反応に対して答えたり、ほめ言葉をはさんだりすることがあまりできなかった。私はすぐに英語が出てこないの、児童の反応を具体的に予想し、それに対する対応の仕方を考えておくべきだと思った。また、私は英語を使う場面設定に力を入れ、意味や目的のある活動をしたかったが、スモールトークの話題が活動の内容とうまくつながっていなかったように感じたので、次回は目的を明確にして活動できるように工夫したい。

<第 12 時、2 回目の模擬授業に向けて選択した項目>

J-POSTL	54. 児童のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	3. 友達・教員等に相談する、話し合う

J-POSTL	65. 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。
ストラテジー	4. リラックスして間違いを恐れず楽しむつもりで行う
	11. 合いの手、ほめ言葉、疑問文等を用い、やり取りをつなげる
	14. 笑顔を保ち、児童〔役〕の目を見て話す（アイ・コンタクト）
	15. ジェスチャーや表情をつけて話す

J-POSTL	79. 児童が授業活動において英語を使いたくなるように設計し指導できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	3. 友達・教員等に相談する、話し合う
	9. 児童〔役〕に伝わるよう、繰り返して言う

<第14時、2回目の模擬授業後の自由記述>

中学校生活についてのやり取りのデモで「友達づくり」「勉強が難しくなる」といった自分が中学入学前に感じた不安をエピソードとして伝えた。楽しみなことだけでなく、何でも伝え合えることを示したため、とてもリアルな対話になった。共感が得られていることが感じられた。

事前に児童からどんなことが飛び出してくるか書き出して、それらに対する対応をシミュレーションしておいた。会話を継続することができ、自信になった。

J-POSTL 43 についての自己評価：2 → 3

J-POSTL 54 についての自己評価：2 → 3

J-POSTL 65 についての自己評価：3 → 3

J-POSTL 79 についての自己評価：2 → 3

〔学生Bのポートフォリオより〕

<第9時、1回目の模擬授業に向けて選択した項目>

J-POSTL	18. 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の気持ちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	11. 合いの手、ほめ言葉、疑問文等を用い、やり取りをつなげる
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える
	18. 教具・カード等を用い、手作業を取り入れ、思考を促す

J-POSTL	23. 身の回りの事物や日常生活について、基本的な語句や表現を使って話すことができる力を育成するための活動を設定できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	7. 児童[役]に伝わるよう、簡潔で平易な英語表現を用いる
	9. 児童[役]に伝わるよう、繰り返して言う
	12. 文法や語順を確認する
	19. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する

J-POSTL	39. 文脈の中で慣れ親しんだ語彙を使用できるような言語活動を設定できる。
ストラテジー	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	5. 大きな声ではっきり話す
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える
	17. 音声教材を用い、聴覚に訴える

<第11時、1回目の模擬授業後の自由記述>

歌や単調な発音練習が多くなってしまい、楽しい活動ができなかったように感じた。歌でも何かを意識させる方法を加えるなど工夫が必要だと思った。また、全体に対して問いかける場面が多かったため、一人一人に順番に聞くなどしてより多く発言機会を設けた方が良かったと思った。伝える時も、英語だけではなく日本語やジェスチャーを補わないと伝わらないこともあるため、ジェスチャーや表情、例の提示などをして分かりやすく伝えられるように意識していきたい。

ネット上の先輩の模擬授業例をじっくり見てみると、加えたい工夫が明確になった。リハーサルでの助言を受けてワークシートを作った。

また、リハーサルでの助言で、児童が言いたいことが思いつき易いよう、既習表現を黒板に示した。スムーズに活動できるように仕向けることの大切さを感じた。

やり取りが型通りになってしまいがちなので、ペアでのやり取りが活発になるよう、リアクション（イラストと英語）のカードを作って黒板に貼っていた。

J-POSTL 18 についての自己評価 2 → 3)

J-POSTL 23 についての自己評価 2 → 3)

J-POSTL 39 についての自己評価 2 → 3)

<第 12 時、2 回目の模擬授業に向けて選択した項目>

J-POSTL	49. 児童の意欲を高める目標を設定できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える
	18. 教具・カード等を用い、手作業を取り入れ、思考を促す
	19. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する

J-POSTL	64. 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	4. リラックスして、間違いを恐れず、楽しむつもりで行う
	5. 大きな声ではっきり話す
	11. 合いの手、ほめ言葉、疑問文等を用い、やり取りをつなげる
	14. 笑顔を保ち、児童[役]の目を見て話す（アイ・コンタクト）

J-POSTL	70. 授業内容を、児童の持っている経験、知識、身近な出来事、文化などに関連づけて指導できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする
	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える
	18. 教具・カード等を用い、手作業を取り入れ、思考を促す
	19. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する

〈第14時、2回目の模擬授業後の自由記述〉

ペアでのやり取りの後、他己紹介風に発表してもらうことを伝えておいた。授業の流れについては、児童の意見を取り入れて決めるのもよいと思った。

出だしに体を動かしてもらえば、スイッチが入ると思い、Small Talk 中の質問にジェスチャーで答えるよう指示したが、いつもと同じように英語で答えてしまった。

6年生なので、かなり深いことや人によって違ったことを言ってもらいたいが、どうしても型通りの表現になってしまい、知的満足に導くのは難しいと思った。

J-POSTL 49 についての自己評価 2 → 3

J-POSTL 64 についての自己評価 2 → 2

J-POSTL 70 についての自己評価 2 → 2

〔学生Cのポートフォリオより〕

〈第9時、1回目の模擬授業に向けて選択した項目〉

J-POSTL	20. 表情、ジェスチャー、あいづちなどの非言語コミュニケーションを効果的に使って、相手とやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。
ストラテジー	11. 合いの手、ほめ言葉、疑問文等を用い、やり取りをつなげる
	15. ジェスチャーや表情をつけて話す
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える

J-POSTL	38. 児童が適切に自己表現できるようになるための語彙を例示できる。
ストラテジー	7. 児童〔役〕に伝わるよう、簡潔で平易な英語表現を用いる
	9. 児童〔役〕に伝わるよう、繰り返して言う
	10. 児童〔役〕に伝わるよう、例をあげる
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える

J-POSTL	55. 児童がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。
ストラテジー	4. リラックスして間違いを恐れず楽しむつもりで行う
	5. 大きな声ではっきり話す
	11. 合いの手、ほめ言葉、疑問文等を用い、やり取りをつなげる

J-POSTL	61. 児童同士のやり取りを促す活動計画を立案できる。
ストラテジー	1. 図書館やネット上にある「指導事例」を参考にする
	3. 友達・教員等に相談する、話し合う
	9. 児童〔役〕に伝わるよう、繰り返して言う

<第11時、1回目の模擬授業後の自由記述>

英語で授業をするとすると、日本語で授業をするのとは違う緊張感があった。自分が唐突に思いついた質問や呼びかけ・指示なども、英語でどんなふうに言えばいいのかわからなくなる場面が多々あった。自分の英語力もあげていくべきだと感じた。児童に今回の授業ではここまでわかってもらいたいという思いははっきりしていたものの活動が単調だったのでおもしろさをもっとあれば良かったなと思った。

<第12時、2回目の模擬授業に向けて選択した項目>

第9時と同じ項目を選択。

<第14時、2回目の模擬授業後の自由記述>

既習事項を使うように仕向ける工夫が思いつかなかったが、Nさんがやっていたイラストでヒントを与えるやり方を取り入れた（I like …=♡、I can …=♣を板書）。

型通りのやり取りだけでなく、継続するような合いの手や質問をはさんでもらいたかったなので、リアクション（Really? Ah … I see など）を紹介し練習するパワポを作ったら、アイ・コンタクトや表情もはるかに良くなった。

言いたいことを考える時間を与え、日本語でメモってもらったのがよかった。活動後の「言いたいけど言えなかったこと」も多く出された。

J-POSTL 20 についての自己評価 2 → 4

J-POSTL 38 についての自己評価 2 → 4

J-POSTL 55 についての自己評価 2 → 2

J-POSTL 61 についての自己評価 2 → 2

〔学生Dのポートフォリオより〕

<第9時、1回目の模擬授業に向けて選択した項目>

J-POSTL	18. 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の気持ちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。
ストラテジー	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	8. 児童〔役〕に伝わるよう、ゆっくり言う（問の取り方を調整する）
	12. 文法や語順を確認する
	13. 発音、イントネーションを確認する

<第11時、1回目の模擬授業後の自由記述>

活動の設定はできたと思う。しかし、自分の気持ちや意見を伝え合う力は、日頃、教師が合いの手や質問をはさみながら Small Talk 行うことで、児童同士の Talk も徐々にできるようになると期待するが、時間がかかるだろう。

日本語で答を返してきた児童に対して、どのような反応をするべきか考えていな

かったので、想定しておく必要がある。ペアでの活動の終わりから次の活動への切り替えが上手く行かなかった。切り替え方を工夫すべきではないか。今回は児童役のおかげでスムーズに進んだ。ペア活動は時間を決めてタイマーを使った方が良いのか。チャンツを練習するときの児童の様子があまり活発にならなかったもので、チャンツを練習するときに、もう少し言いやすい環境作りや動機づけはできないだろうか。褒め言葉が単調になってしまったので、事前のヴァリエーションを豊富にしておきたい。合いの手も同様にヴァリエーションを増やし、児童の発表に毎回合いの手を入れて、先生がやり取りの手本となるようにしていきたい。悩ましいことが多すぎる。

〈第 12 時、2 回目の模擬授業に向けて選択した項目〉

J-POSTL	71. 授業開始時に、児童が授業に注意を向けることができるように指導できる。
ストラテジー	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える

J-POSTL	74. 個人学習、ペア活動、グループ活動、クラス全体などの活動形態を工夫できる。
ストラテジー	2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする
	16. 画像・映像・ポスター・実物などを用い、視覚に訴える
	19. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する

〈第 14 時、2 回目の模擬授業後の自由記述〉

12 歳当時の自分の写真を載せたパワポを作成。大いにウケたのでこちらもスイッチが入りテンポよくできた。ICT 活用の効果も実感した。

リスニングと教師とのやり取りは個人、答え合わせはペア、疑問文練習はクラス全体と、活動のヴァリエーションを幅広く変化させることができた。74 番の記述文を意識してよかったと思う。

J-POSTL 18 についての自己評価 2 → 3

J-POSTL 71 についての自己評価 2 → 3

J-POSTL 74 についての自己評価 2 → 3

5.3 研究目的に対する検証

本研究の目的、すなわち「短時間の模擬授業（マイクロ・ティーチング）について、J-POSTL エレメンタリーとマイクロ・ティーチング・ストラテジー 20 を併用することにより、省察（反省を改善に繋げる振り返り）を促す実践を通して、学生の思考・行動の実態と変容への理解を深めることにより、本授業の質を高めること」については、以下のように、一定の成果を得られた。

- J-POSTL エレメンタリーとマイクロ・ティーチング・ストラテジー 20 の利用により、学生の授業実践に対する思考を促すことができた。
 - J-POSTL エレメンタリーとマイクロ・ティーチング・ストラテジー 20 の利用により、学生の変容を具体的行動と自由記述から読み取ることができた。
 - J-POSTL エレメンタリーは、複数の要素が複雑に絡み合っている課題、つまり、学生の漠然とした向上心や改善欲求を分野ごとに整理することを助けた。
 - 「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」は、改善に向けた具体的な方法を示しており、動機づけを高め実践への意欲を喚起した。
 - 学生は、自らの意思で行動変容を起こしたことにより、自己評価が高くなった。
- 一方で、
- 反省や後悔にとどまらない改善・成長につながる省察を促すのは容易ではなく時間がかかる。
 - 短期的な取り組みであるため、ここでの経験が彼らのその後の「省察力」の維持につながるかは確証が持てない。

6. 今後の課題

前述のように、2021 年度より必修科目となるため、3 年次後期に小学校免許の取得を目指す学生全員が履修する。中には中学・高校の教員を目指す者がおり、予想される課題は以下の通りである。

- 履修者数が多くなるため、授業中の観察、授業外の質問・相談への対応、提出物のチェック等に当てる時間の確保が難しい。
- 将来、小学校英語に関わらないと決めている学生など、本授業実践と省察方略のトレーニングにニーズを感じない者も少なくないと懸念される。
- 学生自身に、模擬授業を通じた学習活動や振り返りの共有の仕方についてイニシアティブを与えることで、主体性を涵養することはできないか。
- 授業終了後、卒業まで接点のない学生がほとんどなので、振り返り等の分析結果の共有の仕方を検討する必要がある。

これらに対し、

- ①この取り組みはいかに「学びに向かう力」を涵養し自律性を養うかに焦点を当てており、その効果は英語教育に限定されるものではないことを強調する。
- ②これまで以上に、学生の情意や思考に耳を傾け、学生同士で共有する時間を設け、主体的に行動することから、感じ・考え・行動するプロセスを活性化させる。授業実践の進め方についてできるだけ学生の意見を反映させる。

6.1 J-POSTL エレメンタリーを用いた 2021 年度「英語科教育法」の指導方針

6.1.1 J-POSTL エレメンタリーの言語学習観・教育観について

J-POSTL エレメンタリーは、重なり合う以下の①～⑤を踏まえ、小学校の英語指導者に求められる資質・能力と授業力を明示している（図 5 参照）。そこに定められ

た言語学習観・教育観について解説することで、基礎的な知識・技能ならびに授業力についての成長を記録し自己評価力の向上を目指す意義を認識させる。

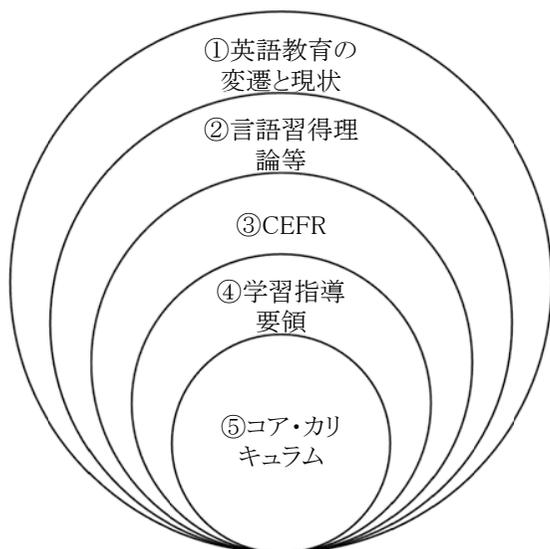


図5 J-POSTLの成り立ちの背景

- ①文脈（英語教育を取り巻く状況と求められるもの）の理解
- ②言語習得理論（学びのプロセス、言葉を使って何が出来るかを重視）
- ③『ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）』（欧州評議会、2001）の機能志向の言語学習
- ④学習指導要領（学習者の学びに向かう力を育成するには教師にも自律性が必要）
- ⑤「英語科教育法」コア・カリキュラム（文部科学省、2017）

6.1.2 J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文の分類について

使用を予定している J-POSTL エレメンタリー完成版（神保他、2021）には 167 の自己評価記述文があり、教職の経験年数を目安として 5 段階、すなわち、教職課程履修学生用（70 項目）、初任教員用（36 項目）、5 年程度の育成教員用（19 項目）、5 ～ 15 年程度の中堅教員用、15 年以上の熟練教員用（19 項目）に分類されている。

それぞれの学生が行う模擬授業の場面や目指すところに応じて、教職課程履修学生用（70 項目）の中から意識して取り組みたいものを選択させる。

6.1.3 J-POSTL エレメンタリーの使い方について

J-POSTL エレメンタリーはポートフォリオとしては細部にまで行き届いた構成になっているが、学生にとっては一文の中に様々な観点が含まれておりその内容の把握自体が難しい。現職教員であれば、日々の実践と並行して長期にわたって使用することで各記述文が言わんとすることが理解でき、使用場面にどのように落とし込むのかもわかってくるだろう。しかし、学生が模擬授業において J-POSTL エレメンタリーを効果的に使用するには補助的支援策を講じる必要がある。以下について検討し 2021 年度の実践に備えたい。

- (1) 自己評価記述文の内容理解が難しい。→学生が記述文を熟読し、検討・議論し合う時間を確保する。
- (2) 自己評価記述文の選択が難しい。→学生が模擬授業で扱う内容（単元・活動のねらいと特徴、言語表現、語彙等）を理解し記述文の分類（図6参照）と照ら

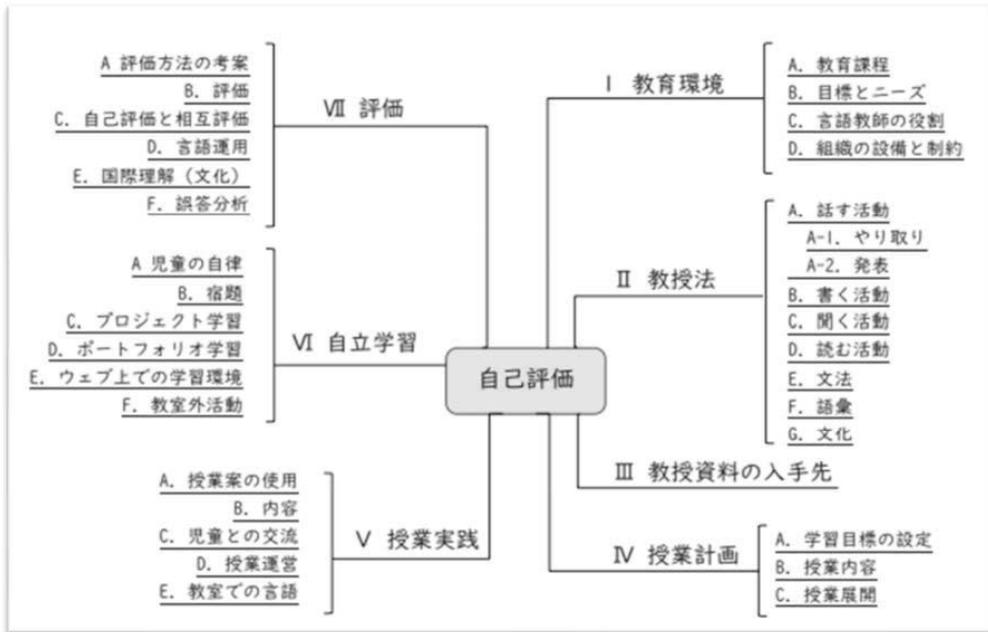


図6 自己評価記述文の分類

し合わせ、妥当な選択へと導く支援策を検討する。

- (3) 本研究で選択した自己評価記述文の概念を模擬授業の指導案作成や模擬授業実践に落とし込む際に使用されたストラテジーには偏りがあった。→理解しやすい表現に修正したり例をあげたりする。

参考文献

- アレン玉井光江他 (2020a). 『New Horizon Elementary 5』東京書籍
 アレン玉井光江他 (2020b). 『New Horizon Elementary 6』東京書籍
 アレン玉井光江他 (2020c). 『Picture Dictionary』東京書籍
 Damasio, A. (2000). The feeling of what happens. New York: Mariner Books.
 樋口耕一 (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析』東京：ナカニシヤ出版.
 神保尚武、久村 研他 (2020). 『小学校英語指導者のポートフォリオ (教職課程試用版)』
 JACET 教育問題研究会
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/TrialJPOSTLElementary.pdf>
 神保尚武、久村研他 (2021). 『小学校英語指導者のポートフォリオ』
 JACET 教育問題研究会
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/CompleteJPOSTLElementary.pdf>
 文部科学省 (2017) 「外国語 (英語) コアカリキュラム案」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/

attach/1388110.htm

永倉由里 (2020). 「小学校英語指導力育成のためのストラテジー・トレーニング」『中部地区英語教育学会紀要』第 49 号、341-348.

永倉由里 (2021). 「英語 I における ICT 活用と協同的省察の試み」『常葉大学教育 学部紀要』第 41 号、349-372.

中谷康夫 (2005). 『オーラル・コミュニケーション・ストラテジー研究』開文社出版

欧州評議会 (2001). 『ヨーロッパ言語共通参照枠』<https://rm.coe.int/1680459f97>

柳瀬陽介 (2014). 「J-POSTL は省察ツールとして 英語教師の自己実現を促進できるのかーデュイーとユングの視点からの検討ー」 「言語教育エキスポ 2014」発表資料 <https://yanaseyosuke.blogspot.com/2014/03/j-postl-2014.html>